拝啓　今年も早や7月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、木々の深緑の葉っぱがきれいです。

　今回は、小西芳之助先生の『エペソ人への手紙講解説教』からの引用の第2回目です。今回のエンカウンターの4頁「あがないのイエスの説明」には、次のように書かれています。

「あがないのイエスの説明

司会者、ヨハネ伝を読んでくれたまえ。ヨハネ伝6章53節から56節。

「イエスは彼らに言われた、「よくよく言っておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。」（ヨハネ6：53－56）

　あがないといったら、これです。イエスがご自分でこのあがないのことを説明なさっている。これはイエスの肉を食らい、血を飲むことです。もらう。イエスの肉をもらい、イエスの命をもらう。すなわちあがないを信ずるということは、それは称名となって、我々はとらえたらいい。

　ここで話を聞けば、「なるほど、あがないだ、ありがたい」と言って、このあがないのことは信じているけれど、うちへ帰れば、もう心は妄念で、もう自分の心は自分のことばかり思っている。そうですから、あがないの信仰を続けるためにも、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と主の名を称える必要がある。

　このヨハネ伝6章53－56節、このイエス・キリストの血を飲み、肉を食らうということは、これはあがないを信ずるということでありますが、それはどうしたらいいかというと、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と称えたらよろしい。」

　エンカウンターで引用する文章の見出しは、私がつけていますが、今月号の見出しの中に、「「贖い」が福音の内容」、「福音・永遠の命はただで来る賜物」、「贖いのイエスの説明」（上記)、「奥義」、「贖い」、と、贖いに関連する見出しが多いことに気が付きました。

　この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』7月20日

「源信、源空（法然)、親鸞

源信は、救いとは何かを教えた。

源空（法然）は、救いに至る道を教えた。

親鸞は、救いに至る道を自分のものにする方法を教えた。

この3人なくして、私は、日本人として、聖書の示す救いを受けることが出来なかったであろう。」

新渡戸稲造先生『一日一言』7月1日

「今年もはや半ば過ぎたれども、前半歳の歴史は敗軍の記事なれば、あと半歳には見事取り返すべし。これより速行を旨とすべし。善なり、義なりと認めたならただちにその方針に進むべし。貯蓄が大切と認めたなら、即日1銭の預金せよ。学問が大事と思うたら、即日1ページ読書せよ。」

松下幸之助先生『続・道をひらく』「脚下照顧」

「禅寺に行くと、その玄関に「脚下照顧」と書いたところがある。足もとを見よ、履物をきちんとそろえよ、という意味であろうが、見る人が見れば、履物の脱ぎ方によって、その人の人柄や、心がけが分かるものらしい。

　脚下照顧、まず脚もとを整えよ。

　この際、家をきちんとし、周囲を整え、姿を正し、心を定めて、お互いの繁栄のために、我、何をなすべきかを、静かに考えてみたいものである。」

内村鑑三先生『続一日一生』7月1日

「キリスト教は元来十字架の宗教である。これはただにキリストの教えではない。十字架につけられ給いしキリストの教えである。その教うる所は、我らがキリストにならって十字架につけらるることではない。キリストがわれらのために十字架につけられたまいしことである。十字架はただにキリスト教の表号（シンボル）ではない。その中心である。キリスト教の全構造が依って立つところの隅の親石である。罪は、十字架の上に許され、又消滅され、恩恵は、十字架の上に成就られし功績を信受する条件のもとに、約束せられ、また、施与せらるるのである。まことに十字架なくしてキリスト教はない。今や、キリスト教ならざる多くのものがキリスト教として通用するこの時に際し、我らはキリスト教を呼ぶに新しき名をもってするの欲求を感ずる。しかして余は、この欲求に応ぜんがために、十字架教なる名を提供する。」

バークレー先生『ウイリアム・バークレイの一日一章』（6月9日）

「死者は語る

　ヘブル人への手紙の記者はあの素晴らしい第11章において、アベルについて、「彼は死んだが、今もなお語っていると」と言っている、これは多くの人について言えることである。

　両親は死んでも今なお語っている。

　亡くなった多くの教師が今なお語っている。

　多くの場合、友達は死んでもなお語っている。偉大な友人の影響は死を超越したもので

ある。
　多くの伝道者は死んだ後もなお語る。
　人間はすべて自分の一部を残してこの世を去っていくものである。人は死んでもなお語り続ける。ねがわくは、われらがこの世を去る時に、イエス・キリストのために語り続ける何か良きものを、残していくことができますように。」

　無教会では、荒井克浩さんの著書『無教会の変革――贖罪信仰から信仰義認へ、信仰義認から義認信仰へ」（教文館、2024 年）という図書が話題となり、6 月 8 日、この本をめぐって、立教大学でパネル・デスカッションが行われ、旧約学者月本昭男先生の「新約聖書の贖罪信仰」という報告を聞きまして、大変感銘を受け、私の贖罪信仰の理解が少し進みました。その印象を文章にまとめ、高円寺東集会の皆さまに話しました「イエス・キリストの十字架の贖いの信仰について」という小文を同封いたします。ご覧頂ければ幸いです。
　新型コロナについては、病院ではマスクをつけるように指導されていますが、電車の中とかスーパーでも、まだマスクをされている人が多少おられるように思います。マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意して、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024 年 7 月 21 日　　　　　　　　　　　　　　　　　　山口周三

エンカウンターの読者各位